ハイブリッド日本人論：私たちが考える国民国家の限界と未来
Hybrid Japan: The Limits and Potential of Our Nation-State

高橋理奈*、関勇也**、永田靖悟**、遠藤萌子**、白須あずさ**、谷山智恵**、水谷小百合**、朴星辰*、森川憂規*、小代有希子**
Rina Takahashi*, Yuuya Seki**, Seigo Nagata**, Moeko Endo**, Azusa Shirasu**,Chie Taniyama**,Sayuri Mizutani**, Sungjin Park*, Yuuki Morikawa*, Yukiko Koshiro**
*日本大学国際関係学部国際総合政策学科，**日本大学国際関係学部国際教養学科
E-mail koshiro.yukiko@nihon-u.ac.jp

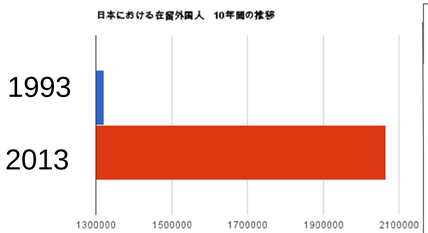
戦前日本の植民地帝国は同化政策の下、人種・文化・言語が異なる人々を日本人に「変えて」いた。戦後植民地を全て失った日本人は「単一民族」というアイデンティティを強め、外国人は日本人になれないという排他的考えを持つようになった。しかしグローバル化が進んだ日本社会ではそうした常識の改革をする必要がある。小代ゼミナールでは我がキャンパスの大学生を対象に調査を行い、自国に暮らす「他者」を受け入れる姿勢を考察した。

【日本社会の現状】

現在日本の中では国際結婚の件数、ハーフの出生率、外国人労働者人口などが増加の一途を辿っており、日本に帰化する人々も増えている。彼らは血筋や国籍、言語や宗教、生まれ育ちなどさまざまな面で日本と他国の特性を兼ね備えている。彼らを**ハイブリット日本人**と呼ぼう。しかし日本社会は彼らを無条件に日本人として受け入れているとは言い難い。彼らが日本社会の一員となるためには、様々な条件を持つことが期待されている。

【アンケート実施】

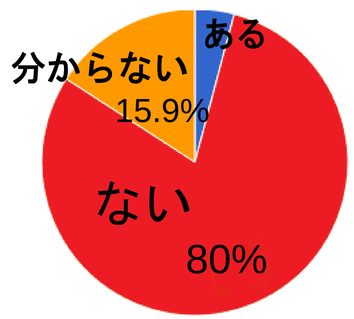
日本に暮らす「純粋」日本人は、ハーフの人々や外国出身の帰化日本人を**ハイブリット日本人**として受け入れる姿勢はあるのだろうか。我々ゼミナールでは、日本大学国際関係学部の１学年から４学年までの学生280人（男子130人、女子150人）を対象にアンケートを実施した。年齢、性別による意識の違いも考慮した。同じ質問をアプローチを変えて質問し、回答に一貫性があるかを調べ、彼らの無意識の差別感情を明らかにした手法が今回の特徴だ。



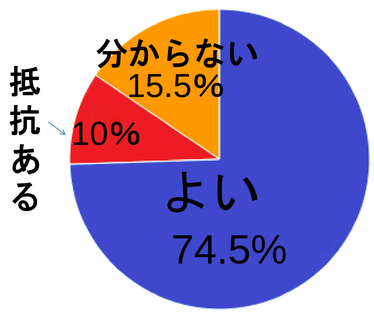
日本における在留外国人の増加率

＜日本社会のグローバル化現象＞に対する学生たちの理解度
★★☆☆

★日本で暮らす外国人の81%はアジア出身（83%が正解）
★日本で生まれた赤ちゃんがハーフの確率は50人に1人（52%が正解）
☆総人口における外国人居住者数割合は1.6%（80%が不正解）
☆日本人で外国人配偶者をもつ人の割合は5%（85%が不正解）



【日本に永住または帰化する外国人は完璧な日本人になる必要があるか】



【彼らは母国の文化・習慣を守り続けてもよいか】

【外国人が日本人になるために必要なこと】という問いに対する回答
1位、日本国籍（23.89%）
2位、日本語能力（20.76%）
3位、日本の伝統文化を尊重（14.23%）

日本語を話し日本国籍を持つボビーを日本人だと思わない人が多い。**見た目が重要**ということか？

Q,**全ての条件を満たすボビー・オロゴンは日本人？**

そう思う→ 4.4%
なんともいえない→ 32.7%
そう思わない→ 63.0%

<男女で見解が違う点に注目> 外国人の受け入れに関しては、女子より男子が消極的である。異なる文化や価値観が持ち込まれ衝突を生むことを、なぜ男子の方がより懸念するのか今後の研究が必要である。

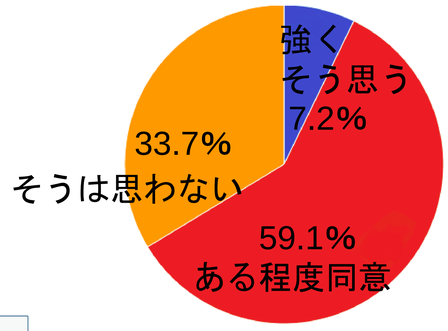
学生たちは、ハイブリッド日本人の受け入れに好意的積極的であるように見える。 が・・・

【日本社会のメンバーかどうか見た目で判断するか】という問いに対して
83%の学生が、『見た目は関係ない』と主張。
しかし様々な人種背景を持つハーフの人たち、帰化外国人などのリストを見せ
「日本人と思う」人を選んでもらうと、判断基準に一貫性がないことがわかる。

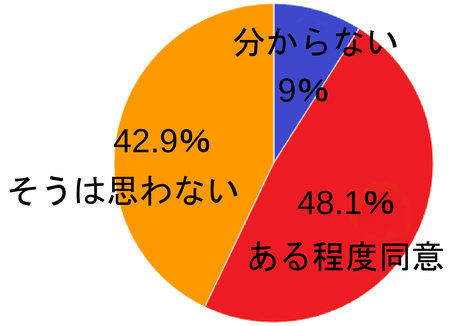
日本人とアジア人とのハーフ→ 64．0%がそう思う
日本人とヨーロッパ人とのハーフ→ 49.0%がそう思う
日本人とアフリカ人のハーフ →49．7%がそう思う

左の結果ではアフリカ系の人たちの方がややヨーロッパ系より受け入れられているようだが、「全く日本人と思わない」という回答はアフリカ系が**3.74%**に対して、ヨーロッパ系が**2.72%**とアフリカ系への拒絶が高いという矛盾が露呈した。日本人と結婚したフィリピン人と日系ブラジル人を比較すると、前者を日本人と思うのは**16%**に対して後者は**6．8%**。

外国人が国内に流入しすぎると、日本らしさが薄れる可能性がある



伝統芸能の落語を真剣に勉強するアメリカ人はすでに日本人だ

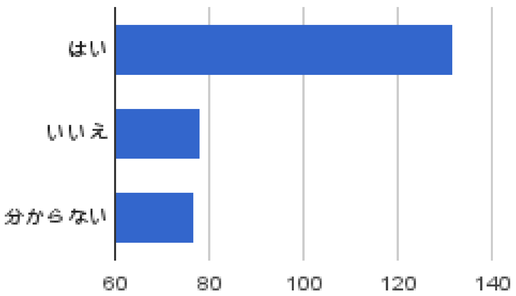


学生たちは日本社会の国際化に積極的であろうとし、ハイブリッド日本人のポテンシャルを評価しているようである。しかし彼らが日本に定住していく場合、日本以外の要素を持ち続けることには不安を覚え、日本文化に完全同化することが望ましいと考えているのではないか。

日本国籍を取得していても、外見・習慣・文化など異なるハイブリッド日本人を社会の一員として受け入れる心の準備はまだない様子が見える。学生たちは頭では寛容性を意識していても無意識に日本人であることに伝統的な期待をしている。

【二重国籍を認めても良い？】

はい：46%



国籍に関して下級生はユートピア的理想論、上級生は法的価値を尊重する傾向があるが、国籍の意義に関する意見を聞くと以下のように一致する。

- ◆**愛国心**を示す手段
- ◆**アイデンティティ**を決定する
- ◆その喪失は**文化の喪失**

半数近くが二重国籍は許容できると答える一方、90%が『**国籍**』**を個人の拠り所**と考えている。

矛盾？　実は国籍の意味を深く考えたことがないのでは？

日本国籍をもつアイヌの人々を「日本人とは考えない」と答えた学生は、21%いた。
一方、帰化韓国人（日本国籍所有者）を「日本人と考えない」と答えた学生は、16.3%。
この差はどこから出たのか？

〈国民国家の限界〉

”単一民族”というアイデンティティが日本という“1つの国に1つの民族”の国民国家を作り上げ、その社会は「純粋」な日本人だけを「日本人」としてきた。21世紀はグローバル化の波が確実に日本にも押し寄せてきており、ハイブリッド日本人が増えてきた。国際社会に目を向けてみても伝統的な国民国家から抜け出し、新しいハイブリッド社会を作ろうとしている国も少なくない。そんな彼らを拒む余裕は、現在進行形で人口が減少し続けている日本にはない。

〈意識改革の必要〉

我々は意識的には外国人を受け入れようとしているようだが、無意識下にハイブリッド日本人を日本人と区別している。
見た目、国籍、日本語能力などを「日本人」になるための条件として彼らに要求している。これでは植民地の同化政策と変わらない。
これからの日本は、「外国人」が伝統的な日本人的要素を取り入れて「日本人」になることを期待するのをやめていくのはどうだろうか。
今後はさまざまな「日本人」の形を認めていくのはどうだろう。日本で生きることを選択した日本以外のルーツを持つ人々が、
日本人である規範だけに縛られることなく、その人を構成する全てのルーツを大切にしながら、同時に日本社会の一員として生きていくことも必要だ。
自由に選択した個々のアイデンティティが、何のプレッシャーもなく社会に受け入れられ、その社会のメンバーとして生きられる－日本もそうなったらどうだろう。

そのためには、ハイブリッドな日本人を受け入れるような意識改革が、若い世代から必要ではないだろうか。